

## 解説 — 「幕末風聞集」について —

### 一 「幕末風聞集」の体裁について

「幕末風聞集」全五巻は、平成元年（一九八九）に東海大学付属図書館が購入した古文書である（請求番「21058/F/1〜5」）。本史料の伝来やそもそもの作成者や所蔵者など、基本的な情報はよくわかっていない。また、ここでいう「幕末風聞集」はあくまでも便宜上用いた通称であって、史料の表題そのものではない。内容について、詳しくは第三章に譲ることにして、ここではまず、「幕末風聞集」の基本的な体裁についてまとめておきたい。

表1は、「幕末風聞集」の各巻の寸法と丁数を一覧にしたものである。この表には、本書で翻刻した際の頁数も入れておいた。全五巻と書いたが、実際にはそれぞれの表紙には、第一番から第五番まで番号表記がされている。以後、本史料の各巻については、この番号表記で呼ぶこととする。

五巻とも縦横の寸法はほぼ同じであり、いわゆる半紙判（250mm×170mm）の範疇にはいる史料である。ただし、各巻の厚

さは異なっており、第四号がもつとも厚く、丁数、頁数も一番

表1 風聞集の体裁

風聞集	縦	横	厚	丁数	頁数
第一番	263mm	175mm	15mm	93丁	36頁
第二番	250mm	170mm	13mm	78丁	28頁
第三番	239mm	172mm	15mm	86丁	55頁
第四番	247mm	176mm	20mm	117丁	69頁
第五番	248mm	175mm	10mm	55丁	37頁

頁数は28字×20行×2段組を1頁とした。

多くなっている。丁数で次に多いのは第一番であるが、厚さは第三番とほとんど同じで、丁数もほとんど変わらないものの、翻刻した頁数では、第三番が一九頁分多くなっている。また、第一番と第五番は、翻刻した頁数はほぼ同じであるが、丁数は三八丁分第一番の方が多い。つまり、表1からみる限り、単純にもつとも字が細かく、情報量が多いのが第五番で、逆にもつとも少ないのが第二番ということになる。いずれにしても、それぞれの巻は、必ずしも統一した書式・様式で書かれたものではないということである。た

だし、その中でも第二番から第四番まではある程度の統一性を認めることができる。それは各巻の表紙をみても明らかである。

各巻の表紙を改めて比較すると次のようになる。

〔表紙〕  
第壹番

嘉永六丑八月

異国船聞集

〔表紙〕

風聞集 第貳番

長坂清寿天保六未年十月夕文久

元酉年迄国内諸城下隠密及上書事

并二大和五条暴起一条巨細之記

文久二戌年正月於西丸下御老中

〔表紙〕  
安藤対馬守へ切懸懇願愁訴至

風聞集 第參番

土州藩曙茶屋二而会津藩

壬生浪士与騒動之次第

長州藩福原始之暴挙并召捕

野州大平山筑波山二屯之水藩

信濃路方越前へ立越加州侯陣へ降伏之事

〔表紙〕  
風聞集 第四番

武之拾八名家靈宝画銅喩

毛利家諸応接金銀分銅

鑄形目方巨細之論 長戦争等

〔表紙〕  
三浦長門守勢州詰被蒙事

戊辰従孟春三月至

世評風聞集 第五番

薩藩蒸氣二艘逃出し伊豆沖二而終二打留

伏見戦争終有栖川宮大総督東征至

第二番から第四番の表題は基本的に「風聞集」となっており、その後それぞれの内容を要略した表題が書かれているなど、形式がまったく一緒である。これに対して第五番は「世評風聞集」となっていて、その後には要略表題もあるが簡略である。筆跡をみれば、これも第二番から第四番までは同じで、第五番もほぼ同じと考えられる。これらに比べると第一番は、表題のあり方からしてもかなり異なっていることがわかる。筆跡もま

た異なっているが、ただし、「第壹番」の文字だけは第二番以降と一緒で、後から書き加えたと考えられる。いずれにしても、第一番だけは、第二番以降とその成立からして異なっているように思われる。表題でも明らかのようにこの巻は、嘉永六年（一八五三）のペリー来航についての記事を中心としたものである。体裁からみる限り、ここでは、第二番・第三番・第四番が「風聞集」の中心であること、第五番はこの続編ではあるものの、形式が変わってきていること、また、第一番は第二番以降と大きく異なっていることを確認しておきたい。

## 二 「幕末風聞集」の作成者について

それでは、この「幕末風聞集」の作成者は誰なのであろうか。また、その目的は何であったのだろうか。「幕末風聞集」自体には、直接、作成者であることを確認できる記載はなく、目的についての記述も一切ない。だが、史料をみていくと、作成者については、いくつか類推できるような記述がみられる。結論からいえば、「幕末風聞集」は、伊勢松坂（現三重県松阪市）か、あるいはその周辺の人物である可能性が高いと考えられる。各巻の中から、作成者につながるような情報について検討してみ

ることにしよう。

まず「幕末風聞集 第一番」には、この人物がそもそもその作成者ではなかったかと思われる痕跡がみられる。裏表紙に「豊川」の文字があり（三六頁）、裏表紙をめくると「南勢 魚町住 田中重益」とある（三五頁）。さらに文末の後にもやはり「豊川写」という文字がみえる（三五頁）。「南勢 魚町住」は、南伊勢地方は松坂の中の一町である魚町と考えて間違いないであろう。松坂葉屋山村壺仙著「宝曆はなし」によれば、魚町には田中姓が二軒あるというが、「重益」に該当するような人物は今のところ確認できない（『日本都市生活史料集成』四 城下町篇Ⅱ収録）。「豊川」は雅号であろうか。図1にみられるように、なかなか意匠的に凝った「豊川」の印も押されている。ただし、いずれも上から貼紙がしてあって、これらの文字や印は、すべて抹消しようとしたのではないかと考えられるのである。「幕末風聞集 第一番」がもともととは別のものであったかもしれないと考える理由の一つである。

内容的にもまた、いくつか注目される記述がある。その一つが、「幕末風聞集 第二番」の中で、天誅組の浪士たち一〇〇人



図1. 「豊川」印

あまりが、大和国吉野郡（現奈良県）から同郡谷村（現奈良県下市町）へと入り込み、鷲家口村（現奈良県東吉野村）へ兵糧米の支度を求めてきたこと、そのため鷲家口村から瀬戸村（現和歌山県西牟婁郡白浜町）を越えて伊勢の方まで押しかけてくるかもしれないということで、紀州街道の警備のために現在の三重県と奈良県との境にある高見峠まで、「鉄炮打之者」を召し連れて手配したという情報が、文久三年（一八六三）九月二三日付で、「川俣大庄屋中」から「松坂大庄屋中」宛に出されていることである。しかもこの情報は、「田丸」へもそのまま伝えて欲しいとある（五九頁）。ちなみに鷲家口村は、天誅組が壊滅した地として知られている。

伊勢国飯高郡松坂は、天正一二年（一五八四）に蒲生氏郷が豊臣秀吉から一二万石の城主として封じられると、同一六年、良港があり街道沿いの要地であったこの地の西方丘陵、四五百森（よいほのもり）に築城して、地名を「松坂」と改めたという。以後、松坂城は、服部一忠、古田重勝と受け継がれていくが、重勝の弟重治が襲封した後、元和五年（一六一九）に重治は石見国浜田（鳥根県浜田市）に転封となった。同年、徳川家康の第一〇子徳川頼宣が紀州藩主となると、松坂の地は同藩領となり、松坂領六万石と呼ばれ、以後松坂城には紀州藩代官が

置かれることとなった。また、伊勢国度会郡田丸（三重県度会郡玉城町）は、伊勢本街道と熊野街道の分岐点となる交通の要衝で、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いの軍功によって、伊勢国岩手城主であった稲葉道通が二万石を加増されると、道通は田丸城に移って、この地を城下町とした。その後、元和三年（一六一七）には、稲葉氏の転封を受けて津藩領となり、続いて元和五年には、松坂と同様に紀州藩領となり、田丸領六万石と称するようになった。つまり、いずれも紀州藩の飛地領であり、それも和歌山に向かう街道の重要拠点だったのである。そのため、いずれにも大庄屋会所が設けられていた。ただし、川俣はこの場合、どこの地名をさすのか、鷲家口村などの天誅組に関して、槍組を川俣へ振り替えたとあるので、あるいは、吉野郡の川俣村（現奈良県五條市）かとも思われるが、具体的には不明である。また、これらの記事に引き続いて「幕末風聞集 第二番」には、天誅組一件に関して、大和に出張した津藩領魚見村（現三重県松坂市）の来状写も収録している（五九頁）。これがわざわざ「津領魚見村」と書かれていることからみても、天誅組に対する一連の動きが紀州藩のものであったことは確かであろう。

ただし、「幕末風聞集」には、これら以外に明らかに松坂のこ

とと確認できる記事はみられない。そこでもう一点、注目したいのが、大坂からの来状や聞書などが「幕末風聞集」には多数収録されていることである。大坂以外でも江戸や京、あるいは名古屋からの来状などもあるのだが、質・量ともに大坂からの情報がぬきんでている。「幕末風聞集」では、とりわけ第三番と第四番、中でも第四番に多い。文言としては、「大阪方八月十二日夕出書面写し左之通」「大坂方来状之写」「大坂状」「四月十九日大坂詰方申来写」といったものが散見される。この大坂の情報「幕末風聞集」の史料価値を左右するといっても過言ではないが、残念ながら、差出人も請取人も不明なものがほとんどである。こうした中で一件だけ、両者がはっきりしているものがある。第四番にある「大坂木綿問屋袴屋善三郎方六月廿日出二而長井嘉左衛門江申来ル書面之写」（二六〇頁）という記述である。内容的には、第二次長州征伐における大坂の現況を知らせてきた書面である。

このうち請取人の長井嘉左衛門は、松坂湊町で木綿問屋と両替商を営む豪商である。伊勢大神宮の所在地である伊勢地方は、古来より海上・陸上交通の要衝として、商業の盛んな地域であった。関東にもすでに小田原北条氏の頃から進出していたといわれており、徳川家康が江戸に入国して以降は、他国に先駆け

て伊勢の商人たちが江戸に進出し、大きな勢力を保っていたといわれている。松坂は、蒲生氏郷によって城下町が建設されて以来、良質の松坂木綿の生産とあいまって、伊豆蔵・長谷川・小津・中川・小野田などの諸家が江戸に進出していった。その代表格が、三井財閥の租となる三井八郎右衛門の越後屋である。長井家は、屋号を梅屋といい、江戸の出店を大和屋と称していた。特筆すべきは、長井嘉左衛門が長谷川治郎兵衛・小津清左衛門・殿村佐五平・坂田五郎兵衛とともに、紀州藩の金融に關する御用達として御為替組五家に名前を連ねているということである。長井家が御為替組に加入したのは、宝暦五年（一七五五）のことで、紀州藩から一五人扶持を下賜されていた。時代は下るが、文化一〇年（一八一三）には二五人扶持となり、天保三年（一八三二）に地士独礼格、文久四年（一八六四）には大御番格を拝命した家柄であった（『松坂市史』第十二卷 史料篇 近世（二） 経済）。

いっぽうの袴屋善三郎については、詳細は不明であるものの、高麗橋町や道修町（現大阪府大阪市）に店を構える木綿買次問屋の袴屋の系列の一つであったと思われる。すでに正徳六年（一七一六）における長井家の木綿販売では、買次問屋として大坂の袴屋の名前をみることができる（北島正元編著『江戸商業と

伊勢店』吉川弘文館)。いずれにしても、袴屋善三郎は、古くから長井家と取引のある大坂の木綿買次問屋であることは間違いないところで、そうしたルートからの情報が書き上げられているのである。

このほかに名前が確認できるものとして、第四番に「大坂竹川彦太郎店方実録聞書」とある(一六二頁)。この「実録聞書」とは、長州におけるいわゆる四境戦争の内、大島口(現山口県)での戦闘の状況を報告したものである。竹川彦三郎家は、摂津国川辺郡尼崎町(兵庫県尼崎市)の両替商で(「浮世の有様 卷之六」矢野太郎編『国史叢書 浮世の有様 3』国史研究会)、三井八郎右衛門とともに大坂会所為替御用達を勤めた家である。幕末には箱館物産会所の御用達も勤めていた(『函館市史』通史編第2巻)。やはり、大坂の豪商の一人であったが、竹川の場合には、請取人の記載があるわけではない。

恐らくであるが、袴屋善三郎から長井嘉右衛門への来状は、そもそもこの二人が「幕末風聞集」の作成者にとって第三者であるからこそ、差出人・請取人の双方の名前が出てくるのである。これに対して、竹川からの「実録聞書」は、竹川から作成者に直接届いたものと考えられないだろうか。そうであれば、一般的な文言が「大坂方来状之写」「大坂状」などとあるのは、

自分にとっては周知のことであるから、書く必要がなかったと考えられる。そしてその人物、つまり作成者は長井嘉右衛門とは、ごくごく近い人物であったといえよう。そうなると、やはり気になるのは、すべての巻に押されている「殿村図書」の蔵書印である(図2)。



図2. 「殿村図書」印

殿村家もまた、松坂の豪商の一人であった。殿村佐五平が、長井嘉右衛門とともに紀州藩の御為替組五家のうちの一家であったことは先に述べたとおりである。殿村家は、松坂中町住で、江戸時代の中期頃から木綿問屋・両替商として活躍し、代々松坂の大年寄を勤めていたという(前掲『松坂市史』第十二巻)。また、当家から出た佐五平安守は、松坂出身の国学者本居宣長の最晩年の弟子であるとともに、滝沢馬琴とも深い交友関係があつて、文化人としても知られた存在であった(『松坂市史』第七巻 史料篇 文学)。宣長門下の鈴門としては、宣長亡き後も後継の春庭の後見人として本居家を支え、門人の中心として活躍した。御為替組となったのもこの安守の時代であった。

ただし、殿村家は松坂に四家あつて、この本家佐五平家のはかに、別家の殿方(足立万兵衛家)、殿忠(殿村忠兵衛家)、殿

八（橋本八右衛門家）があつたという（前掲『松坂市史』第十二卷）。いっぽう、大坂には内平野町二丁目（現大阪府大阪市）に殿村平右衛門家があり、米屋・両替商を営んでいた（『大坂内平野町殿村蔵書目録』）。それぞれの関係については、今一つ不明ではあるが、一般的に考えれば、大坂からの来状は、この大坂内平野町の殿村平右衛門家から、松坂の殿村家のいずれかに出されたものと考えても、あながち無理な解釈だとはいえないであろう。松坂四家の中ではやはり殿村本家の可能性が高いであろうか。ちなみに本居宣長記念館の吉田悦之館長にお伺いたところでは、この蔵書印は初見であるとのことであつた。

「幕末風聞集」の作成者については、現段階では伊勢松坂の商人ではないだろうかということ、ここまでの考察を進めてきた。もちろん、確定できたものでない以上、さらに内容を吟味して、ほかの可能性についても検討されなければならない。

### 三 「幕末風聞集」の内容について

本来ならば、「風聞集」「風説留」などような、さまざまな情報を書き留められた史料については、類似の史料との比較はもちろんのこと、それぞれの記事や収録された書簡・文書・記録

などがほかの史料集などに収録されていないか、あるいはそもそもその出典は何なのかといったことについて調査・検討されなければならぬであろう。また、史料そのものについても、そこに登場する人物や書き留められた記事の内容等々詳細に検討していく必要がある。ただ、「翻刻にあたって」でも述べたように、今回は翻刻することが主で、そこまではいたっていない。さらにいえば、書かれた記事・内容がどれくらいの価値を持つものか、ほかではみられない新出のものなのか否か、その真偽も含めて、専門外の身からは判断がつかないのが現状である。したがって、ここでは各巻ごとの概要をごく簡単にまとめることと、とくに編者自身が注目する点について若干の意見を述べることで責を果たしたと考える。

**第一番** 第一番には①「和蘭陀国ヨリ告密書」（一頁）②「亜墨利幹国船浦賀湊来着聞書」（六頁）③「亜美理駕大合衆国書翰漢文和解」（二八頁）の三件の内表紙があつて、それごとに内容がわかれている。

①には、天保一四年（一八四三）一二月二七日のオランダ国王ウイレルムⅡ世の日本への開国勧告と、これに対する弘化二年（一八四五）六月朔日付、阿部正弘ら幕府老中の回答書、そ

して嘉永五年（一八五二）の「阿蘭陀別段風説書」の抜粋の三点が収録されている。②はこの巻の中心となるもので、嘉永六年（一八五三）六月三日のペリーの浦賀来航以降の記事が並ぶ。

③は、アメリカ合衆国大統領フィルモアの漢文和解と、ペリー書翰の漢文および蘭文和解が収録しており、その後にはまた、ペリー来航後の記事が続く。ペリー来航後の記事といっても、六月三日から七月六日までのひと月あまりの時期に限られている。とはいえ、②③に収録された記事では、浦賀奉行所や警衛の諸藩、江戸の町方、江戸城内など、それぞれの動向を示す史料がまんべんなく並んでいて、来航直後の全般的な対応状況を知ることができる。

とくに②で注目されるのは、浦賀奉行所与力からの聞書である（一七頁）。この史料は、ペリー来航時の具体的な状況を浦賀奉行所の与力五人からの聞書という形でまとめたもので、幕府の機密文書としてあつかわれていたものである。だが、実際は、海防担当の諸藩をはじめとして、広く一般に流布しており、多くの写本が存在している。ただ、それがどのような経緯で写されたかという点については、ほとんどわからないのであるが、ここでははつきりと、千葉周助の門人ならびに磯又右衛門の内弟子が浦賀を訪ねて、原惣藏なる人物から提供を受けたことが

わかる。千葉周助は、千葉周作の誤記であろう。千葉周作が開いた剣術の一派北辰一刀流の道場玄武館と、磯又右衛門が開いた柔術の一派天神真楊流の道場とは、ともに江戸神田お玉が池の、それ以外はす向かいにあつて、両道場の門弟の交流は盛んであつたといわれている。その両道場の門弟たちが、連れ立って情報を求めて浦賀まで出向いたという点でも興味深い。なお、この「与力聞書」については、『新横須賀市史』資料編 近世ⅠにNo.二九五（八三四頁）として全文が収録されている。

「幕末風聞集 第一番」の様式などが、第二番以降のものとは異なること、場合によっては別人の手によるものであることは先の述べたとおりである。その正否はしばらくおくとして、幕末動乱のそもそもの起点がペリーの来航、すなわち「ウエスタインパクト」にあつたということが、「幕末風聞集」の作成者に強く認識されていたことは間違いないであろう。そして第一番では、その前提として、オランダ国王ウイレムⅡ世による開国勧告から収録している点が注目される。ペリーの書翰では、今回の来航については、オランダを通じて事前に通達していたということがことさら強調されているので、「風聞集」の作成者もとくにそうした点を注目したのかもしれない。また、ペリー書翰自体も漢文和解と蘭文和解がそれぞれ三種類確認できる。



『幕末外国関係文書之一』では、漢文和解と蘭文和解が一セツトになっているだけである。

**第二番** 第二番には内表紙のようなものはないが、史料につけられた表題で内容を分けることができるようなので、そのまま書き抜いてみる。

- ①乍恐以書取奉申上候 清寿事 長坂蒼峯(三七頁)
  - ②御宸筆写し(四四頁)
  - ③七月十三日出之書状(四五頁)
  - ④京都方文通指出(四七頁)
  - ⑤当時高名英雄録 一枚摺画図之写書(四七頁)
  - ⑥北亞米利加船渡来二附、神奈川表江御用船二而及出張、於横浜応接場ニ相撲興行一件其外共控(四九頁)
  - ⑦嘉永七寅年二月廿六日右御用相済、同廿七日江戸表江罷婦ル、即刻鏡岩方百足町小沢与右衛門殿江参写書(五一頁)
  - ⑧注進写(五六頁)
  - ⑨和州五条乱妨一件聞書(五六頁)
  - ⑩当時珍書(六一頁)
- ①は江戸城表坊主長坂蒼峯から提出された文久元年(一八六〇)一月付の「書取」である。蒼峯は、文政期(一八一八〜一八三〇)に老中格水野忠成(駿河国沼津藩主)と老中大久保

忠真(相模國小田原藩主)の御部屋御用勤ならびに年寄方御手元書留兼帯を勤めていたが、とくに忠真には、父清寿の代から懇意にしており、蒼峯もまた、忠真によって取り立てられ、御奥向まで種々の御用向を勤めるようになったという。大久保忠真は、二宮尊徳の登用などで知られるように、小田原藩における化政〜天保期の藩政改革全般を担った人物で、幕閣としては、文政元年(一八一八)に老中に列し、天保五年(一八三四)には勝手掛老中の一人に、また翌天保六年(一八三五)には老中首座に任じられている。徳川家斉の信任によって権力をふるったとされる水野忠成とは対立する関係にあり、それゆえに水戸藩主徳川斉昭と親交の深い人物であった(『小田原市史』通史編近世)。忠真は、家斉の驕奢な振舞いと外夷が国家の危機を招く可能性があるということ、天保六年九月初旬に蒼峯を宅に召し寄せて、国々の内情を探るように命じたという。事実ならば、忠真が老中首座になった直後である。蒼峯は以後、四度にわたって諸国を内探して廻ったと述べている。内容について具体的にみていけば、いくらか時期的な齟齬などがあつたりするので、必ずしも全面的に信頼できるわけではない。ただ、注目されるのは、この「書取」が文久元年に上申され、しかもこれまでの内探の結果として、將軍徳川家茂の上洛を強く勧めてい

るということであろう。それを目的とした上申であったという方がよいかもしれない。なお、瀧本誠一編『日本経済大典』第四七巻には「長坂氏書上」が収録されている。また、①と②の史料は、横の長さが一五二・二冊と短く、別帳になっている。これが最初の部分にそのまま綴じ込まれているのである。

さて、第二番の中でもっとも古い記事は、⑥嘉永七年（一八五四）にペリーが再来航した際に横浜の応接場において行なわれた相撲興行の記事であり、それから文久三年（一八六三）の天誅組の変にいたるまでのさまざまな情報が書き留められている。先の一覧を見てもわかるように、時代順あるいは項目別に分かれているわけでもない。ここでは、記事の内容から四点だけ指摘おきたい。

一点目は、將軍継嗣に関する問題である。ペリー来航直後に就任した徳川家定は生来虚弱であったことから、その後継をめぐって一橋慶喜を擁立する一派と紀州藩の徳川慶福を擁立する一派が激しく対立し、いわゆる安政の大獄の一因となっていた。第二番では、③④においてそうした將軍継嗣に関する情報が書き上げられており、しかも情報の内容が水戸藩（茨城県水戸市）——一橋派のものに限られている。第二章において、「幕末風聞集」の作成者が紀州藩領松坂の商人ではないかと予想した

が、こうした情報のあり方もまた、本史料が紀州藩側の立場に立って作成されたものではないかということ想起させる。

第二点目は、將軍家茂の上洛に関する問題である。ただし、これはあくまでも①の「蒼峯書取」に関する限りで取り上げるというだけで、將軍継嗣問題以後の諸事件、すなわち尊王攘夷派の動向や、安政の大獄、桜田門外の変、公武合体、和宮の降嫁、薩摩藩島津久光の率兵上洛に江戸下向といった問題についての情報が取り上げられているわけではない。唯一、坂下門外の変についての記事は見られるが⑩、將軍上洛そのものについても詳しい記事があるわけではない。後に述べるように「幕末風聞集」は、政治向きの記事が多いのだが、第二番ではこれらの重大事件についての記述はほとんどみられない。

第二番の根幹となるのは、⑦の後半から⑧⑨にある天誅組の変に関する情報であろう。天誅組の変は、周知の如く、孝明天皇の大和行幸決定を契機として、土佐の吉村虎太郎や備前の藤本鉄石らに率いられた尊王攘夷派が天誅組を結成し、文久三年（一八六三）に大和で拳兵した事件である。天誅組は、河内の庄屋層や十津川郷士などの参加をみて、大和五条代官所を襲撃して本陣とし、以後、吉野郡鷲家口村（現奈良県東吉野村）の戦いなどで壊滅するまで各地で大規模な戦いをくり返していた。



図3.松坂城御城番屋敷（馬場撮影）

この鎮庄には、諸藩の藩兵が動員されており、紀州藩からも兵を派遣している。紀州街道に対する警衛を固めたことは、第二章で触れたとおりである。実際、ここでは出兵に関する若山（和歌山）からの来状や情報なども書き上げられている。これが第三点目である。

いずれにしても、この天誅組の変に関する記述は非常に詳細であって、「幕末風聞集」のそもそものきっかけはこの事件にあったのではないかと推測させる。少なくともこの文久三年が、「幕末風聞集」が編纂される一つのきっかけであったことは間違いないであろう。

なお、この文久三年には、紀州藩から松坂城に御城番が派遣されることになったことが注目される。同年には、御城番となる四〇石取の紀州藩士二〇人用の組屋敷が建設されており、現在、この御城番屋敷は重要文化財に指定されている。松坂

にとっても文久三年は、政治的・軍事的にも画期となった年であったといえよう。

第四点目は、⑤にみられるような類の風刺文芸が、収録されるようになるということである。川柳や風刺画、芝居の見立てなどの風刺文芸は、第三番と第四番に多く、第一番と第五番にはみられない。このような風刺文芸については、その目的や意図についての考察も必要であるが、編者の能力におよぶところではないので、第三番、第四番を含めて、指摘だけにしておきたい。

**第三番** 第三番以降になると、第一番や第二番のように内表紙や表題など、ある一定のくくりで内容を区分することができなくなってくる。そのかわり、第二番に比べると書かれている内容や時期が比較的はつきりしている。第三番の表題では、元治元年（一八六四）六月におきた壬生浪士、すなわち新選組と土佐藩士との「曙茶屋」、正確にいえば京都の「明保野亭」における騒動一件がまず書き上げられており、実際に内容もこの一件から始まっている。だが、第二番の坂下門外の変もそうであるが、表題に書かれているからといって、必ずしもそれに関する内容が詳しいかというところではない。一応、同年六月五日の池田屋事件にも触れてあるが、新選組についての記事はこれく

らである。

第三番で軸となるのは、①元治元年六月以降の京都における長州藩の動向と、同年七月の蛤御門の変（禁門の変）、②同年八月の四国艦隊による下関砲撃事件、そして③同年三月、水戸藩で起きた天狗党による筑波山（茨城県）挙兵事件、いわゆる天狗党の乱に関する記事である。一応、慶応元年（一八六五）の記事として、長州の処置に関する記事や天皇家の山陵の修補問題、あるいは風刺文芸などをみることができる。また、慶応三年の記事として、関所通行規則の改変についての触書が収録されているが、これは料紙も筆跡も異なっているので、後からつけ加えたものと思われる。したがって第三番は、ほぼ元治元年の記事でまともまっているといってもよいであろう。時間的推移も元治元年でいえば、六月から一二月まで記事が一応時系列で並んでいる。とくに蛤御門の変までの経緯に関しては、ほぼ時系列であるが、七月に天狗党の乱に関する情報が入り出した頃から、多少時系列が前後するようになる。というよりも蛤御門の変から四国艦隊下関砲撃事件にいたる長州藩の動向に、天狗党の乱の情報がアトランダムに入り込んできて、それをそのまま書き上げているという感じを受ける。だから書き方としては、一見非常に杜撰にみえる。

ただし、これは第二番にもあるいは第四番・第五番にもいえることであるが、書かれた記事は、例えば戦鬪の状況であったり、挙兵した具体的な人物や年齢、その生死や怪我、追討の状況など、非常に臨場感があつて生々しい。情報源は、来状―書簡であつたり、実録、聞書、あるいは風聞、噂などと称する雑多な情報であつて、一種ルポルタージュのような感じさえ受ける。また、これに関連して集めた情報は、庶民の動向に関するものは少なく、幕府や各藩の動向など、とりわけ政治向きのものに強い関心を示しているようで、実際詳しい。この二点は、本史料の大きな特徴といえよう。

蛤御門の変については、京都の警衛で紀州藩も派兵しているので、やはりその意味が大きいかと思われるが、同時に天狗党の乱についての情報の詳細さについても目を見張るものがある。天狗党の乱は、改めていうまでもなく、水戸藩の下級武士を中心とした尊王攘夷改革派が天狗党に結集し、田丸稻之右衛門、藤田小四郎、武田耕雲斎らを首脳として、筑波山に挙兵して各地で保守派の諸生派らと戦った、一大激化事件である。第三番では、天狗党の壊滅にいたる顛末まで、ある種執拗に情報を集めており、それだけ興味深いものであるが、その史料的な価値については、残念ながら、今後の研究にゆだねなければならな

い。

それにしても第二番の天誅組の変といい、第四番以降の長州征伐や鳥羽・伏見の戦いといい、作成者は、内乱あるいは内戦的な状況に強い関心を持っているようである。いずれも藩兵が鎮圧にあたるような大事件である。その分、外交的な問題は下関砲撃事件以外は、そう大きな関心を示しているとも思われない。例えば、「幕末風聞集」には、薩英戦争に関する記述はいっさい見られないのである。また、いわゆる世直し一揆のような農民蜂起の記事も見受けられない。その意味でいえば、もう一つの関心は、やはり水戸藩への眼差しということになるのか。將軍継嗣問題もそうであったが、天狗党の乱への関心もまた、水戸藩への関心の深さでもあるともいえる。その意味でも興味深いのは、前中納言、すなわち徳川斉昭の腹心であったという人物に、生前の斉昭の言動や思想について問い合せた御尋ねの書である（九一頁）。この腹心が誰か不明であるし、聞き手も加州侯、これは加賀藩主の前田斉泰かと思われるが、水戸家の家来と加州侯が「当家」に罷り越したので、極密に重役より聞いたとある。内容はといえば、井伊直弼暗殺は斉昭の指示であったこと、斉昭自身は本居宣長の本居学に深く傾倒しており、それが思想や行動の根拠になっていること、斉昭はとくに天皇を

廃そうとは思っていなかったものの、伊勢国に送って神官の司になつてもらおうと考えていたことなど、結構、刺激的な回答が並んでいる。真偽の程はまだ定かではないが、本居学の件からしても「当家」を紀州徳川家と考えるには無理があるだろうか。

**第四番** 第四番は、それまでの巻と比べてもある意味内容がわかりやすい。時期的には慶応二年（一八六六）一月三日から九月二五日までの記事が収録されている。内容的には元治元年一月二日に終結した第一次長州征伐の後、藩主毛利敬親・定弘父子と長州藩に裁定が下つてから、第二次長州征伐の開戦そして集結にいたるまでの記事を書き上げたものである。慶応二年段階のものにはなるが、第一次長州征伐後の交渉過程が詳細にわかる。とくに長州藩側の引き延ばし工作が興味深く、そこから第二次長州征伐への流れが時を追って詳しく確認できる。

第一次長州征伐後、長州藩に対しては、一〇万石の減封を課した上で、藩主敬親を蟄居隠居、定弘を永蟄居とすることを骨子とした処分が下されたが、これが拒絶されると、慶応二年六月五日をもって総攻撃を行なうことが公示され、三藩に出兵の命令が下された。そして六月七日の周防大島口（現山口県）での戦闘を手始めに、一四日芸州口（現広島県）、一六日石州口

(現鳥根県)、一七日小倉口(現福岡県北九州市)の、いわゆる四境で幕府郡と長州藩との全面对決となった。長州側で四境戦争といわれるゆえんである。

幕府側では紀州藩主徳川茂承が征長総督に任命され、紀州藩は前面にたつてこの戦闘を指揮する立場となった。したがって、第四番に収録された具体的な戦況は主に紀州藩のものであり、幕府内部の情報も紀州藩にかかわるものが中心となっている。それだけにこれも第三番と同様、戦闘の状況が非常にリアルで詳しく、また幕閣や諸藩に関する情報そのものも高度に政治的なもので、それが日を追って詳細に書き留められている。それが第一の特徴である。その意味でいえば、尾張藩主徳川慶勝が征長総督を務めた第一次長州征伐に関する記述が「幕末風聞集」にいつさい出てこないのも示唆的である。

第二に、大坂からの来状がとくに多いのも第四番の特徴で、来状以外の情報を含めて、大坂の状況に関する記述がとにかく詳しい。実際の戦闘は慶応二年の七月であったが、将軍家茂は、慶応元年閏五月から大坂城に在陣していた。開戦まで一年以上にわたって在陣していたわけであるから、大坂にとってみても第二次長州征伐の過程というのは、実に大きな問題だったのである。大坂からの来状を含めたこれらの情報の史料的な価値も

また、今後の課題である。

第二次長州征伐の戦況に戻れば、慶応二年の正月には坂本龍馬の仲介で薩長同盟が結ばれており、四月の段階で薩摩藩は出兵を拒否していた。また、長州軍は、大村益次郎を中心とした軍制の改革で西洋式の軍隊に生まれ変わっており、奇兵隊をはじめとする諸隊の活躍もあつて、各地でことごとく幕府軍を撃破していくことになる。第三番もそうであるが、「幕末風聞集」では、奇兵隊などの諸隊や幕府歩兵隊、そして新選組に新徴組、さらには農兵隊といった庶民を含む新たな軍事・警察組織について触れていることもまた、特徴といえようか。ただし、それぞれの記述内容が詳しいわけではない。また、戦況の中で最新式の「ミニヘール銃」の優秀性を高く評価している点も興味深い。

第二次長州征伐は、七月二〇日に大坂城にあつた家茂が病没したことで停戦への流れが一举に加速し、九月二日には安芸宮島(現広島県廿日市市)において休戦の協定が結ばれた。第四番には、休戦後の措置についても若干記述がみられるが、中心はやはり八月の戦闘までの状況である。風刺文芸が多く収録されたことを差し引いても、第四番がもっとも分量が多いことは先に述べたとおりである。

**第五番** 第五番には、慶応四年（一八六八）正月三日から四月

二二日までの記事が収録されている。第四番に続いて短い期間であるが、内容的には鳥羽・伏見の戦いから東征軍派遣にいたる過程の記事が収録されている。

慶応四年正月三日、薩摩討伐を名目に入京をめざして軍をすすめた幕府兵に会津（福島県会津若松市）・桑名（三重県桑名市）の藩兵らを加えた旧幕府軍一万五〇〇〇人と、薩長を中心とする新政府軍四五〇〇〇人は、京都郊外の鳥羽・伏見の街道で激突した。数では三倍以上あったものの、装備と士気で格段に劣る旧幕府軍は、一日で退却を余儀なくされると、六日には戦闘が終了し、將軍徳川慶喜は、そのまま大坂を脱出して海路江戸に向かった。翌七日には慶喜追討の勅命が下り、九日には総裁有栖川宮熾仁親王を東征大総督とする東征軍が組織された。慶喜は一二日に江戸城西丸を出て恭順の意を示したが、一五日にいたり東海・東山・北陸の三道に分かれて東征軍の進軍が開始されたのであった。

第五番の「風聞集」は、内容的には大きく①鳥羽・伏見の戦いの戦況、②戊辰戦争前後の尾張藩関係記事、③桑名城開城関係記事、④官軍の東征に関する記事の四つに分けることができそうである。このほかにも単発的ではあるが、江戸や大坂の打

ちこわし騒動に関する記事も収録している。ただし、これらの記事はまとまったものではなく、順次、必要な記事を書き連ねるような形となっている。

この中でも質・量とも充実しているのは、①の鳥羽・伏見の戦いと②の戊辰戦争時の尾張藩関係記事である。これまでと同様、それぞれの戦況に関する記述には臨場感があって詳細であり、やはりさまざまな政治的情報が精力的に集められている。とくに①では、これまでよりも京都、大坂、伏見、名古屋、江戸など、できるだけ多くの地域から情報を集めようとしているようすがみてとれる。また、慶喜蟄居後の旧幕府内部の状況に関する記述もたいへん興味深い。前年の大政奉還と王政復古によって、幕府そのものは終焉を迎えたのであるが、組織体としての「幕府」が正式に「解散」したわけではない。老中をはじめとする役職もまだ残っていたのだが、罷免するにしても「解散」するにしても、そのトップである將軍慶喜自身は蟄居の身である。逆にいえば、幕府瓦解、將軍蟄居という事態の中でも、その組織がまだ残っている以上は、何らかの指揮ないしは運営が必要であって、そうした時期の内部状況が垣間みえる史料として注目されるということである。

②尾張藩関係記事では、記録の形態が興味深く、日次の記事

の間に日付の違う関係書類が差し込まれるような形をとっている。日記を基礎に後に再編集したと考えられるが、そうなること日記本来の筆者は尾張藩の関係者ということになるか。ただ、これまでの第二番から第四番の「風聞集」が、紀州藩が中心であったことを考えれば、なぜここで急に尾張藩の記事が中心となるのか、若干、奇異な感じは否めない。なお、ここではイギリス・フランス・ロシア・アメリカ・イタリア・プロイセンの六か国の公使と、薩摩藩家老の小松帯刀との面談についての記事が詳細で興味深い（二〇六頁）。尾張藩との関係でいえば、これは尾張藩が知恩院に入った英国公使への饗応を命じられ、御年寄代御用人の佐枝新十郎が謁見にかかわっていることと関係するものかと思われる。

③桑名城開城関係記事もまた、鳥羽・伏見の戦い後の状況を物語るものである。この戦闘においても旧幕府軍に援軍として参戦していた桑名藩は、京都所司代を勤めていた藩主松平定敬が、実兄で京都守護職の任にあった会津藩の松平容保、そして一橋慶喜とともに、いわゆる「一会桑政権」を形成して、幕末の京都における政治を主導したとされる（家近良樹『幕末政治と討幕運動』吉川弘文館）。記述の量としては多くはないが、ほかの記事に挟まれる形で、勅使の派遣から桑名城の接收決定に

いたるまでの経緯が書き上げられており、桑名藩のその後という点でも興味深いものといえよう。④については、東征軍の軍団編成のほか、具体的には、関東から東北にかけての戦況を伝えた江戸からの来状が二通収録されているだけである。

第五番では今一つ、年号表記について注目しておきたい。表題に慶応四年と書かれている以外、中はすべて「明治元年」で統一されているのである。慶応から明治への改元が九月八日であったから、少なくとも第五番は明らかに明治になってから編纂されたものである。では、第四番以前の各巻についてはどうなのだろうか。第一番が別巻である可能性については先に指摘したが、第二番以降でも「藩」という文言が多用されていることをどうとらえるかなど、各巻の成立時期については今後も検討が必要であろう。

それにしても「幕末風聞集」は、幕末に起きたさまざまな歴史的事件などをまんべんなく集めたというよりも、作成者が重要だと判断した事件の情報を集中的に、かつ詳細に扱っていったところに大きな特徴がある。それだけ内容にもかたよりがあるわけであるが、その基準は何なのか、そもそもどうしてこうした編集方針がとられたのか、興味は尽きない。